

コラム

特別展「松江城大解剖－城郭そして城下町－」企画講演会にかえて（3） －近世大名の儀礼行為－

松江城下町母衣町出土陶磁器

今回、展示されている松江城下町遺跡（母衣町68）出土の多量の磁器群【写真8】は、3年前に初めて拝見させていただいた際に、上質の磁器皿、鉢、猪口が主体としている点やその質の高さに驚いたとともに、加賀藩邸をはじめとする江戸大名屋敷の出土例との共通性が高く、用途として同じ性格を持つものであると感じた。

明末の中国景德鎮窯の古染付、南京赤絵【写真9】、芙蓉手、福建省漳州窯の呉須手などの17世紀前半の磁器などが存在し、江戸における儀礼様式成立とほぼ同時期である松平家松江藩主初代直政時代から、国元でもこうしたものが具備されていたことは重要である。中国はこの時期に明、清の王朝交代の混乱期にあたり、磁器輸入が途絶えたことによって国産磁器の生産技術が飛躍的に高まった時代でもあった。色絵はその象徴的な技術であるが、こうした先進的な技術を使った上質の製品は国内では上級武家の儀礼道具や献上用として利用されるものであった。

この時期の国内製品（伊万里焼）では、おそらく上記中国製品と同じ時期に揃えられた初期伊万里から認められるが、新技術を使った初期色絵（古九谷様式）の南京手大皿【写真10】や型皿が多く含まれ、所有者が質の高い製品を嗜好していたことが分かる。

また、有田の南川原山は、ヨーロッパ輸出用を生産する当時最も精緻な磁器製品を生産する地域であるが、ここでは1670年代に生産された柿右衛門様式の製品【写真11】も確認され、最終的には延宝6（1678）年の火災で廃棄されたものの、寛永期から揃えられた道具は、おそらく儀礼の多頻度化の中で大名クラスが志向するよ



【写真8】



【写真9】



【写真10】



【写真11】

うな上質の製品を買い足して、維持・使用されていたものだろう。こうした陶磁器類のセットは、火災や地震などによって所持しているものすべてを廃棄するようなことがないと全容が明らかにならない。こうした点においても火災によって一括廃棄された本資料は、考古学的な重要性も高い。

考古資料はおもしろい

江戸時代の武家の磁器利用を考えた場合には、日常品のほかに武家の活動として明確に意味づけられた儀礼道具が大名のみならず具備されている。考古資料のおもしろさは、こうした資料が殿町などの上級武家地、あるいは本町、天神町、八軒屋町などの町の中心部などから出土したものではない点にある。

人間の活動は、その地域の地理的、歴史的環境影響と関わることになる。出土資料は、その場で行われた生活を反映しており、これまで行われてきた松江城下町の構造やその変遷、治水政策などの研究とも密接に関わると考えている。

そんなことに思いをはせながら今回の展示を見てもらうとますます興味は尽きない。歴史資料のおもしろさは、知ることと共に考えることにあり、是非足を運んでもらいたい。

堀内 秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室 准教授）

【写真8】松江城下町遺跡〔母衣町 68〕一括出土磁器群

【写真9】色絵樹下人物文輪花皿(出品番号 55)

【写真10】色絵祥瑞手大皿(出品番号 57)

【写真11】上段:染付鳳凰文皿(出品番号 68)下段:染付桐鳳凰文皿(出品番号 69)

※いずれも松江城下町遺跡〔母衣町 68〕出土／松江市埋蔵文化財調査室蔵

令和2年（2020）7月29日 松江歴史館発行